

## 茨城大学文理・人文学部在京同窓会 水交会概要

茨城大学文理・人文学部の在京同窓会は、平成7年9月9日浦安のシェラトン・グラウンド・ベイ・トウキョウで第一回総会を開催し「水交会」の名の下に発足。



初代会長・安藤 康正氏



第一回大会時には、第一回生(昭和28年卒)から第18回生(昭和45年卒)までの政経・経済学科の同窓生を中心に組織化。

名簿の作成<特に近年 E-MAIL での連絡が取れるようにしております>、ホームページの運営及び水戸の同窓会本部との連絡を会長以下の常任幹事が担当し、2年に1回開催の総会については常任幹事と各学年毎の幹事が一体となって活動しています。

名称は在京同窓会ですが、茨城県〃南地区から埼玉、千葉、東京、神奈川・・・を中心に一部水戸・日立地区の方も含めて広く同窓生が集まっています。

第2回、第3回は場所を大手町の経団連会館に移し開催。対象年次も順次拡大し若い方の参加も増えています。

総会には毎回約200名が集まって、同期は勿論ゼミやサークルの先輩後輩との団欒、更に各業界の情報交流の場にもなっています。

○ 第4回からは新装なったサンケイホール4F大ホールで開催しています。

### 『水交会の歩み』と私

#### 一、私にとつての『水交会』

有朋自遠方來、不亦樂乎。

世事に追われているうちに青春時代の瑞々しさを忘れかけていた。

「朋あり遠方より來たる」は多少なりともこれを中和してくれる。

若き日のキャンパスの香りを懐かしみ、そして「それから」を温め会う。

まさに「楽しからずや」である。同窓会の楽しみはこれに尽きる。

#### 二、発足への挑戦から発展まで

同窓会本部からの示唆を受け「在京同窓会」発足に手を染めるようになったのは平成七年五月のことだった。

何をあいても「発会」するに意義あり、幹事一同発足推進に際しては「小さく産んで大きく育てる」に標準を定める。

第一回『水交会』は平成七年九月九日、東京デイズニーランド横のシェラトンホテルにてその産声をあげる。出席者は先生方、本部役員を含めて二百十名超。

当初予想をはるかに上回る華々しい発会となった。

会の進行については 各年次の同窓会を同時同所にて開催する、というコンセプトに基づいた。セレモニーを極力短縮しワイワイガヤガヤ、懇談の時間を多くとることも配慮する。

宴の三時間は瞬時にも感じた。最後は二年後の再会を約して校歌をがなった。

そして二年が経過した。会の発展は幹事がよどみなくバトンタッチされていくのが絶対条件。初回は何とか形が出来た。しかし第二回の開催は心配が倍加する。

チャンピオンは初防衛戦の方がより難しいという。

昔を懐かしんで集まった仲間が約束の二年後 初回と同じ様に集まってくれるだろうか。

幹事にとってはたいへんなプレッシャーとなる。

最大の不安は 気骨の折れるこの力仕事を快く引き継いでくれる後任幹事の存在だった。

果たせるかな、その意志をガッチリ受け継ぎ 難問を見事にクリアーしてくれる同志がいた。

第二回『水交会』は平成九年十一月、舞台を大手町の経団連会館に移して開催された。これもまた初回に優るとも劣らない盛況をみる。

継続は力なり。必然、それは伝統の力となる。

第三回『水交会』は勇躍本年十一月六日、前回同様、経団連会館にて開催される。

### 三、同窓会の効用

（こころざしを果たして いつの日にか帰らん 山は青きふるさと 水は清きふるさと）

先日、NHKのど自慢ペルー大会で昭和十年前後にペルーに移民した九十歳近いおばあちゃんがこの「ふるさと」を熱唱した。

私は何故かこの歌を口ずさむ時うるうるしてしまう。

「郷関」を出る時には、かりそめにも「こころざし」があった。

もとよりその「果たした」度合いはそれぞれのスケールによる。

だが、時としてこの「郷関」を懐かしみ、不可能と知りつつも青春への回帰に思いを馳せる。

同窓会の効用はこんなところにあるのかも知れない。

初代幹事長 清水秀雄(第十一回卒)1999年1月記

現在の当会の役員は別紙の通りです。当会のことについてのお問い合わせは各学年幹事があるいは下記事務局へご連絡下さい。

また、名簿を編纂・発行しておりますが掲載する訳にいきませんので住所等を確認されたい方は、卒業年度、氏名を明記の上事務局までご連絡下さい。

大学の風景は文理・人文学部同窓会名簿及び茨城大学創立期 第1期生の記録 屋口 正一著 から使用させて頂いております。

## 水交会の歩み

第1期<95/9~96/2>

水交会発足にあたって

<茨城大学文理・人文学部同窓会会報 第13号への投稿より>

「水交会」発会に酔う

今にして思えば、  
青春時代の喜怒哀楽の全てが  
あのキャンパスに凝縮されていた。  
その感性はなお今十分に  
自らを支配している。  
単に「茨城大学卒」という肩書きだけでなしに、  
いわばかけがえのない「ルーツ」がそこにあった。  
水戸の地を巣立って幾星霜  
、それぞれにはそれぞれの航路があった。  
「天地にあまねき真理を求めて」とありったけの声を張り上げながら、  
死語になりかけていたノスタルジーという言葉が脳裏をかすめる。  
今、ひととき200余名が首都に集まり、色目俗事を離れて、あたたかき光りとぬくもりを満喫する。  
そして心新たに、明日からのスタートに思いを馳せる。

1995.9.9 幹事長 清水 秀雄氏文理・政経・11回生

### 第一回総会開催

平成7年9月9日、新制茨城大学第1回(昭和28年卒)から第18回(同45年卒)までの文理・人文学部政経・経済学科の在京同窓会を構成員とする親睦団体(通称・水交会)の設立総会が、浦安市のシェラトン・トーキョウベイ・ホテルで開催。



### 恩師と第一回生

当日は200名を超える同窓生の出席の下、第一部の総会が作山友之氏(第12回・39年卒)の総合司会で、まず、安藤康正氏(第1回・28年卒)が挨拶に立ち、会発足に至る経過報告を行った。

氏は挨拶の中で、在京同窓会相互の交流を一層深めたいと設立動機を説明、更に準備の都合上第18回までの卒業生での発足となったが第19回(46年卒)以降の同窓生対応については今後の課題として取り組んでいく旨報告した。

次に、水交会会則案・運営組織案および役員人事案について、清水秀雄氏(第11回・38年卒)より提案説明がなされ、全会一致で承認された。





恩師と4回生



恩師と8回生

来賓の紹介、第二部の懇親会へと移行。

まず、来賓を代表して、文理・人文学部同窓会本部・吉田文二郎会長より暖かい祝辞披露が。

次に、現人文学部長でもある鈴木邦武副会長より大学の現況報告があった。

平成七年の人文学部の入学生は女子の数が男子を上回ったとのこと、またコミュニケーション学科の新設予定があること等、母校の新しい時代の流れをひしひしと感じさせられた。

また、津田隆先生は当時と全く変わらぬ意気軒昂な津田節を披露され、会場の寡困気が大いに盛り上がったところで山口直方氏(第三回・同三〇年卒)の音頭で乾杯へと進んだ。

会場内の各テーブルでは午後のひとときを、若かりし頃の思い出話や近況報告に花が咲き、会終了後も別れがたくそれぞれ二次会へ向かう姿が見受けられた。

尚、前述各氏の他に次の方々に来賓としてご出席を頂いた。

- 永田忠哉先生・武井邦夫先生・野口芳男同窓会副会長・大畠一芳同幹事長・赤津俊幸同理事 -

当日決定した役員<第1期>は次のとおり。

会長・安藤康正(第一回卒) / 副会長・糸口 信(第二回卒) / 副会長・山口直方(第三回卒)

常任理事・幹事長・清水秀雄(第十一回卒) / 総務・作山友之(第十二回卒) / 会計・鈴木康夫(第十四回卒) /

監事・小貫裕文 (第十七回卒)



懇親会風景

仲田正夫(文理・経・17回卒)記